

『皮膚病診療』 42年目のリニューアルによせて

本誌は創刊から42年目を迎え、誌面の大幅なリニューアルを行いました。新しくなった本誌にいただいたご意見，エールを，ここにご紹介いたします。

若い読者をひきつけて欲しい

西岡 清

東京医科歯科大学名誉教授

皮膚病診療がA4サイズで届けられた。表紙は新しくなり、内容も追加されたようであるが、なぜか「編集後記」はなくなったようである。かつては「editorial」と「編集後記」で評判を得ていたのだが。

各ページに装飾が加えられ明るい装丁になっているし、症例の写真も大きくなっている。小生が編集

委員長をしていたときは、創刊号から40年の歴史を大切にするため、できるだけオリジナルの体裁を保つことに努力したが、時代の流れには逆らえないようである。症例報告に合成写真が多くなり、臨床写真が徐々に小さくなり、考按の文章が長くなってしまい、文字幅が窮屈になり、読み辛くなっていた。

リニューアル1号目では、接触皮膚炎を特集しているためか、説明文が少なく、すっきりとしたでき合いとなっているが、むずかしい症例を特集するうちに同じ轍を踏まないかと心配している。

若い読者をひきつけ、購読者が増加することを期待している。

より未来的な構成と編集を

栗原 誠一

長年の懸案だったA4判への更新がなされた。興味をそそる表紙とともに時代のニーズを意識した新企画が加わって、狙いどおりのでき映えでスタートを切った。編集委員・編集部の意気込みが伝わってくる。

- 従来のコンパクトにまとまった紙面に比べると、ページがヘリまであるように感じて眼が泳いでしまった。慣れるかもしれないが、文字も

少し小さいほうが、目が安心しそうだ。また臨床写真が拡大に耐えられないと判断したら小さく載せて、執筆者にクリアな追加写真を要求したらどうだろう。

- 臨床例の書式。伝えたい内容を限られたページ内で読者にわかりやすく正確に表現するトレーニングは生涯の糧になる。怖いオーベン役の編集委員にとってはたいへんな作業だろうが、原著原稿を査読しての修正依頼は大賛成である。
- 皮膚病の診療に関連した、いろいろなことに気づかされ、役立つ、身近な雑誌であり続けて欲しい。「カラーで綺麗な臨床写真……」はノスタルジックな賛辞に過ぎない。読者を巻き込んだ、より未来的な構成と編集を期待している。

若手と先輩の議論の 端緒となるような雑誌へ

片山 一郎

大阪市立大学大学院医学研究科
色素異常症治療開発共同研究部門特任教授・皮膚科

この度、40年以上慣れ親しんできた『皮膚病診療』の新年号が新しいデザイン表紙の大型雑誌として手元に届いた。A4判化に伴い読みやすくなったが、写真は以前に比べて赤味が上手く出ておらず、全体にやや不鮮明な印象を持った。

生まれ変わった、インターネット、eBook時代の

『皮膚病診療』がどのような読者層を対象にしているのかは、これからはっきりしていくのと思うが、個人的には以下にあげる希望など他雑誌にない企画をまた考慮していただきたいと考える。

- 特集のテーマに沿った最新の基礎、臨床研究の簡潔な若手研究者のレビュー。
- 各掲載論文の編集者の簡単な選定コメント。
- 地域皮膚科医会の活動探訪記。
- 皮膚病の歴史や豆知識の紹介。

若手の皮膚科医が専門医の資格論文を投稿するだけでなく、積極的に興味を抱いて読んでくれる、また先輩の先生方との議論の端緒になるような話題を提供してくれる雑誌を期待します。

創刊号からの愛読者の喜び

井上 勝平

飯田市・井上医院

昭和54(1979)年に本誌は創刊された。そのころ小生は宮崎大学皮膚科に初代教授として赴任したばかりであり、本誌はもっとも頼りになる皮膚病診療の道先案内であり、いろいろなことを教えてくれる素晴らしい道連れともなってくれた。

小生は平成12(2000)年に65歳で退官し、南信州の天竜川の中流に位置する小都市で開業したが、毎月郵送されてくる変わらぬ縞模様の表紙を見ながら着実に成長していく姿に惚れ直していた。

30巻を手にしたとき、30歳にして立つとエールを送り、次の不惑の40歳になった『皮膚病診療』を老生も現役で愛読できるのが夢であると「声」欄に投稿した(本誌 30:617, 2008)。

夢は正夢になった。しかも一回り大きくなり縞も少なく色白にリニューアルした表紙とその内容の豊富さに驚愕した。老生も若返った思いがする。

70%インパクト

石川 博康

八戸市・湊高台皮膚科

令和2年1月号から大幅にリニューアルされた貴誌を拝読しました。活字が大きくなって読みやすくなりましたし、写真もやはり大きいほうが見やすい

と思いました。嬉しいことに「診察室の四季」はカラー写真となりました。とても癒されます。浅井先生の「皮膚科のトリビア」も継続で、学会出不精の当方としてはとてもあり難いです。

新人のころ、何か専門誌を購読しようと思い立ちましたがどれを選べばよいかわからず、恩師の故・三橋善比古先生に相談したところ「臨床ならこれです!」と薦められたのが貴誌との出会いでした。他誌はさまざまな疾患のバリエーション一覧と

いう感じでしたが、その前にはまず診断をつけねばならず、その道筋を形態学から導いてくれる『皮膚病診療』には昔もいまとても助けられています。私の数少ない臨床論文のほとんどは、貴誌のお陰だといっても過言ではありません。

さて長年にわたって拝読した貴誌ですが、一番衝撃を受けたのは、西山茂夫先生が以前に寄稿されたエッセイでした。正確な出典は覚えていませんが、かいつまむと「いままでの自分の診断の正解率は70%」という内容でした。当時われわれの世代では、西山先生は「爪をみて肺癌を当てた」など数々の伝説に包まれたカリスマ、いわば臨床の神様でしたから、この文章の衝撃たるや物凄いものがあり、「あの西山先生が70%なら……俺なんかせいぜい50%だ!」とか「いやいや、俺なんか半分もないから……30%? だったらほとんど間違えてるのか?」など皆が半分パニックになり頭を抱えたものです。あの

インパクトは脳裏に鮮やかに残っていて、個人的にはいまでも「まだまだ60%くらいかな?」等と自戒しながら診療している次第です。

似たような専門誌が増えて、どこもたいへんな時代だと聞きます。いまどきの若い世代は本を買わないし読まないといわれますが、医学部の定員増数や新設により、いまでは毎年9,000人の医者が誕生していますから、30年前と比べたら遥かに医者人口は増加している計算になります。現在は情報伝達が紙媒体からデジタルコンテンツに移行しつつある過渡期であり、大手を含め出版会社自体が生き残り戦略を模索している時代です。貴誌のリニューアルもその一環だと思いますが、若い世代へのアプローチはまだまだいろいろあるような気がします。

リニューアルした貴誌の益々のご発展を祈念いたします。

『皮膚病診療』リニューアルに思う

ペンネーム:ヒゲダルマ

本年度より貴誌がリニューアル、文字などが大きくなり老眼が進む身としては読みやすく大助かりです。

皮膚病診療を購読して約30年になります。いまでは当たり前ですが当時から写真はカラーで、臨床写真も組織写真も明快で筆者の意図がわかりやすいものでした。

研修医のころ、大学の臨床カンファレンスでは、皮膚病変の説明を教授が目を閉じて聞き「いまの所見では病名がまったく浮かばない」と、何度もやり直しを命じ、ある程度理解されると臨床スライドに目をやり厳しく相違点を指摘、考えられる疾患ならびに鑑別疾患度をあげて指導されました。供覧する臨床写真はスライド用フィルムを使用しており、枚数の制限などがあるうえにいまのデジタルカメラと違い、その場で確認し撮り直しや修正はできない

ものでした。皮膚病変を的確にとらえるために、ピンツ、シャッタースピード、光加減、身体部位は確認できるかなどに注意し、背景は大丈夫か、下着などの余計なものは写り込まないか、経過写真であれば同じような部位、拡大であるかなど、一枚の臨床写真を撮るのも真剣勝負そのものでした。このような経験をした先生、研修医の指導に苦勞された先生は多いものと思います。

論文を書くときに臨床写真、組織写真をみながら説明文を書くのではなく、皮膚病を診察するときに自分の伝えたい皮膚病変を思い描き、組織所見を想像したうえで臨床写真を撮るように心掛けてはいかがでしょうか。

『皮膚病診療』では、その臨床写真と組織写真をもとに投稿していただく、さらに自分の考えに適した写真を選択すること、病気に合わせて説明文を記載することは遠慮していただく。あくまでも皮膚病変からものを考え、それを読者に伝えるという原稿をお願いするのはどうでしょうか。

その積み重ねが皮膚病診療ルネサンスにつながるのではないかと思います。